

# 相双地域のタマネギ秋まき移植栽培において 有効な雑草防除体系

福島県農業総合センター 浜地域農業再生研究センター

部門名 野菜－タマネギ－雑草防除

担当者 小椋智文

## I 新技術の解説

### 1 要旨

相双地域では東日本大震災後からタマネギ栽培を推進しているが、雑草による被害が問題となっている。このため、各種雑草に対する防除技術を組み合わせ、新たな雑草防除体系を現地ほ場において実証した結果、収穫に影響のない程度まで抑制することができた（図1、表1）。

- (1) 冬生一年生雑草のカラシナに対しては選択性茎葉処理剤のベンタゾン液剤の11月下旬～1月中旬処理（処理の目安：葉齢3葉期、最大ロゼット径約10cm）、冬生一年生雑草のヤエムグラに対しては同剤の1月中旬処理（処理の目安：節数4節）を行う。
- (2) 冬生一年生雑草のノボロギクに対しては土壌処理剤のシアナジン水和剤の2月中旬～3月処理、夏生一年生雑草のシロザに対しては同剤の3月処理を行う。
- (3) 冬生多年生雑草のイヌムギの秋出芽越冬個体と春出芽個体に対しては、選択性茎葉処理剤のクレトジム乳剤の11月下旬処理（処理の目安：生葉数2枚、草丈約5cm）と3月中旬処理（処理の目安：生葉数2枚）を行う。
- (4) これらの防除技術をとりまとめた「雑草防除マニュアル（仮称）」をweb上に公表予定である。

### 2 期待される効果

- (1) 秋まき移植栽培における各種雑草を効率的に防除でき、経営の安定化が図られる。

### 3 適用範囲

- (1) 相双地域のタマネギ生産者

### 4 普及上の留意点

- (1) 栽培予定のほ場に地下茎型イネ科雑草や多年生雑草が繁茂している場合は、耕起前にグリホサート系除草剤などの非選択性茎葉処理剤を使用し完全に枯殺する。
- (2) 選択性茎葉処理剤は対象雑草の生育状況に合わせて処理すること。
- (3) 土壌処理剤は対象雑草の出芽前に処理すること。

## II 具体的データ等

月	9月			10月			11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
主な作業	基肥						定植	越冬期間									追肥			追肥			追肥			除草 <sup>※8</sup>			収穫・乾燥		
雑草防除体系	グリホサートカリウム塩48%液剤 <sup>※1</sup>			ジメテナミドP・ペンディメタリン乳剤 <sup>※2</sup>			クレトジム乳剤 <sup>※3</sup>			ペンタゾン液剤 <sup>※3</sup>			中耕			シアナジン水和剤 <sup>※4</sup>			クレトジム乳剤 <sup>※6</sup>			プロスルホカルブ乳剤 <sup>※7</sup>			プロスルホカルブ乳剤 <sup>※7</sup>						

図1 新規雑草防除体系

注) 農薬使用時は最新情報及びラベルの使用法をよく確認すること。

※1 非選択性茎葉処理剤のグリホサートカリウム塩48%液剤(ラウンドアップマックスロード)は耕起5日前までに使用する。

※2 土壌処理剤のジメテナミドP・ペンディメタリン乳剤(モーティブ乳剤)は定植後すぐに使用する。

※3 選択性茎葉処理剤のペンタゾン液剤(バサグラン液剤)は、カラシナ、ヤエムグラ等の広葉雑草の発生を確認したら使用する。ただし、タマネギ生葉4葉期までとする。

※4 土壌処理剤のシアナジン水和剤(グラメックス水和剤)は、ノボロギク、シロザ、ヤエムグラ等の広葉雑草の発生前に使用する。

※5 選択性茎葉処理剤のクレトジム乳剤(セレクト乳剤)は、イヌムギ等のイネ科雑草の発生を確認したら使用する。

※6 土壌処理剤のプロスルホカルブ乳剤(ボクサー)の3月処理は、土壌処理剤のシアナジン水和剤を3月に使用した場合に省略できる。

※7 土壌処理剤のプロスルホカルブ乳剤(ボクサー)の4月処理は、収穫45日前までに使用する。

※8 翌年4月以降にイネ科雑草の残草が確認される場合は、必要に応じて除草(グリホサートカリウム塩48%液剤の畦間処理や手取り除草等)を行う。

表1 新規雑草防除体系による防除効果 (%)

ほ場	防除体系	被度				
		ヤエムグラ	シロザ	ノボロギク	イヌムギ	その他
A	慣行 <sup>※1</sup>	45	<1	15	<1	12
	新規 <sup>※2</sup>	<1	<1	2	<1	12
B	慣行 <sup>※1</sup>	<1	10	50	20	5
	新規 <sup>※2</sup>	<1	<1	2	6	16

注) 被度とは、ほ場全体において各種雑草が被覆している割合のこと。

注) 慣行防除体系は、耕起前のグリホサートカリウム塩48%液剤処理、定植直後のジメテナミドP・ペンディメタリン乳剤(またはペンディメタリン乳剤)処理、アイオキシニル乳剤(2025年12月現在入手不可)の3月処理、プロスルホカルブ乳剤の2~4月処理。

※1 被度はほ場全体を目視して算出した。ほ場A:2024年6月3日調査,ほ場B:2023年5月17日調査

※2 被度はほ場全体をステップポイント法(畝間を5歩ごとに歩き畝上部に出現した雑草をカウント(計50回)、被度(%)=雑草カウント数/50×100)により算出した。ほ場A,B:2025年5月22日調査

## III その他

### 1 執筆者 小椋智文

### 2 成果得た課題名

(1) 研究期間 令和3~7年度

(2) 研究課題名 先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷管理技術の確立  
〔農林水産分野の先端技術展開事業(JPJ009997)「現地実証研究委託事業」  
(JPFR23060107、JPFR24060107、JPFR25060107)〕

### 3 主な参考文献・資料

(1) 中央農業総合研究センター(現 中央農業研究センター), 農耕地における雑草植生の種組成と量的構造評価のための簡易植生調査法, 2013